

注解『七十一番職人歌合』稿(五)

下 房 俊 一

凡例

一、本稿には『七十一番職人歌合』の中、第十三番および第十四番の注解を収めた。

十三番 烏帽子折 扇壳

【職人尽】

〔長崎一見 職人一首〕十二番右 烏帽子屋 きて見れば烏帽子桜の花盛り左り折りにも折りてほしきよ ……右の下の七文字、堅詰つて聞こゆ。其の上、左り折りにも此判敷。判者は知らぬ也。かかるむつかしき烏帽子桜の哥合、持にやもあらん。(入倫訓 蒙図彙) 扇折 唐土より始まりて、其の時代さだかならず。古語に、月長山に入りぬれば扇を上げてこれを教ゆといふ時は、遙かの上古と聞えたり。都におゐて城殿折は根本なり。城殿、今鷹司通の西に住す。畳紙、此の家に作り名物とす。扇、畳紙ともに公家より此の所に求めらるるなり。中比より五条の御影堂の僧これをなす。女の業なり。扇あまたの手にわたれり。地紙師、絵師、骨師、要師、箱指等、外にあり。末広、中化等は公家、出家、これを持つ。舞扇は能大夫、狂言師、これを持つ。舞扇師、小川通上立売の下にあり。近世、由禪扇とて一風あり。(用明天王職人鑑 職人づくし) 是ぞ此の大内の県召かや諸人に、司を給ひてそれぞれに国名をつきし烏帽子子の、始めにかけし烏帽子屋が身を立烏帽子諸層は、三大臣のお召しとて、高き位や掛烏帽子、十二のかぶり式法の、中に人目の隙額風折烏帽子、折々は、恋に心や採烏帽子、平礼小結梨打ちや、烏帽子屋なれば是をとて、先づ頭にぞ置かれける。／ 我が通ひ路を、塗り込めて、風を通さぬ壁塗はかくと白地の扇屋の、折さへあらば、折を得て、互ひに見ま、星宵……(今様職人尽百人一首 烏帽子屋 これやこの塗るもたたきも風折は締め緒紫あふうちの子せき「下地がもふ出来たぞ」「蠟色に塗りやれ」「漆が走らぬ」「洪塗りは半兵へがしかけるか」(彩面職人部類) 扇 事物起源云、黄帝内伝、有「五明、

注解『七十一番職人歌合』稿(五)

扇ノ之起ヲ。今以招涼風ヲ者、周ノ武王所作玉ヲ也。其品數多ありといへども、就中、神功皇后三韓を責めたまふ時、蝙蝠かほむの羽を見て、はじめて扇を作らしめ給ふは、我朝の濫觴にして、代々官家に檜扇あり。光源氏、五条あたりの夕顔も、惟光が扇あへぬ用となせり。班女が閨のかち草、やんごとなき恋路にも都しのふほどのゆかしき、涼風は勿論にして、男女の中にもわりなき姿ならずや。「職人尽発句合」左 扇子折 春の日や箔の扇の松に鶴 春の日のうららかなるを、箔の光にかけ合はせ、大木の松の絵様もめでたく調へしは、しまりよき仕立なる歟。「貴嶺扇は承安の昔より伝へて、古く名の聞え候ふ」右 烏帽子折 春風に心引き立つ烏帽子かな 烏帽子折が心引き立つと言ひし言葉の軽忍にて、味はひもなければ、左為勝。「昔は馬方、船頭も烏帽子引き入れ候ふものを」(職人尽狂歌合) 扇師・同 扇師も空をあふぎつ 郭公後藤兵衛が細工ならねど 手すさみに折るや扇の觀世水横に流るる山郭公 左、此の故事おのれもよく覚え侍らねど、源平盛衰記にや侍りけん、重衡卿の扇に郭公かきたるを、後藤兵衛折りて奉るとて、誤りて郭公の羽を断ち切りて、勘当蒙りし事あり。此の題にはよく適ひたる古事にや。二の句、後藤が嘆きたる様を思へるなるべし。右、横に流るるなどおかしき中に、初五文字のてすさみといふ詞、いかがあらん。てすさみは、つれづれなる人のまさぐり物にする事にて、なりはひの上にはつきなきやうに思はる。左勝ちて侍るべし。／ 烏帽子折・扇師 眺へに見えし烏帽子の折もよく頭の上に鳴く時鳥 初声に空をあふぎの折もよくかなめと聞きし山郭公 左、三四の句、おかしく続けられり。右、かなめと申す詞、かひがひしげにも覺え侍らず。左勝と申すべし。／ 烏帽子折 郭公今や古音を立烏帽子折りえて耳にとまり鳴くらん 左、烏帽子は耳元まで差し入るれば、耳にとまりてと続けられし、興あり。立烏帽子、秀句よろし。…：仍以左為勝。／ 烏帽子折 あふむけば烏帽子は落ちて沓手鳥頭の上に折々ぞ聞け 左、一首の姿よろし。右、…：勝の字を加へ侍りつ。／ 扇折 郭公鳴きて城殿の扇売空をあふひで折々に聞く …：右、詞続きおかしく、続けがら優に聞こゆめれば、勝と定むべくや。／ 烏帽子折・扇折 沓といふ名をな咎めそ烏帽子折山郭公頂きに鳴け 扇折が葵折り込む折もよくみあれの頃に聞く 時鳥 左、沓新しといへども冠とせずなどいへる古言を下に思ひたるにや。おもしろく聞こえ侍り。右、近き世にさる扇どもの見ゆめを、折からのみあれをもて続けられし、よろし。勝負分別しがたし。／ 烏帽子折・扇折 一声は左よ右と烏帽子折心を採ます初郭公 扇折折も折からずきはひも置みかけてぞ聞く時鳥 左右ともにおかしく思ひ寄せられたり。是も持にて侍るべし。〔略面職人尽〕 比叡おろし加茂の川浪量み置きて風は心にまかす扇屋〔宝船桂帆柱〕 扇折職 金持となるを肝心要にて骨を折人のひさぐ扇屋〔扇屋人のはかぐらも悪ひてんがうじや〕

【本文】

十三番

夜やふかき月のひかりもささひゑほし

夜やふかき―〔明〕秋やふかき〔類〕秋や深き ひかり―〔類〕光
ささひゑほし―〔類〕ささひゑほし

かしらのうへに影のなりぬる

秋さむきねやのあふきの風たえて

雲のおりめのつきそかくるゝ

左哥は停午の月をよめるか。右は、雲の

おりめ、ことゝしくきこゆれとも、今す

こしまさるにこそ。

いかにせむしなれぬ恋のやせやまひ

むくのみ色に身はなりにけり

ほねこはきあふきの紙のうすそくい

おもひもつかぬ人にこひつゝ

左、恋にやせくろむむこと、本説なきにあらす。

ゑほしのむくのみ色、よく思よせたるにや。

右は、道理はたちてきこゆれと、五文字、

まことにこはく侍り。左勝へくや。

◇

◇

ゑほしおり

今時の御

ゑほしは、ちと

そりて仕候。

注解『七十一番職人歌合』稿(五)

かしらのうへに影のなりぬる〔類〕成ぬる

秋さむき〔尊〕秋さむき〔類〕秋寒き あふき〔類〕扇 たえ
て〔類〕絶て

おりめ〔類〕折め つき〔類〕月 かくるゝ〔忠〕〔類〕かく
るゝ

左哥〔類〕左歌

きこゆれとも〔類〕聞ゆれとも すこし〔類〕少し

いかにせむし〔類〕いかにせん やせやまひ〔類〕瘦やまひ

なりなりにけり〔類〕成にけり

ほね〔類〕骨 あふき〔類〕扇 うすそくい〔明〕うすぞく

ひ〔類〕薄そくい

おもひも〔類〕思ひも こひつゝ〔忠〕〔明〕こひつゝ〔類〕恋
つゝ

やせくろむむ〔類〕瘦くろむむ

ゑほし〔類〕烏帽子 よく思よせたる〔類〕能思寄たる

たちてきこゆれと〔類〕立て聞ゆれと

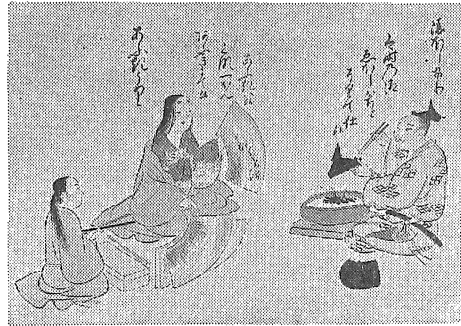
まことに〔類〕誠に

ゑほしおり〔白〕烏帽子折〔忠〕十三番烏帽子折〔類〕えほし折

今時〔白〕今尋〔忠〕今尋 御ゑほし〔類〕御えほし

仕〔類〕ナシ

あふきうり
あふきは候。
みな一ほん
あふきにて候。



あふきうり―〔白〕〔忠〕扇子壳〔類〕扇うり
一ほんあふき―〔白〕一本扇子〔類〕一ほん扇

【語注】

◎烏帽子は黒の布帛または紙製の帽子で、古くは貴賤を問わず成人男子が用いたが、十五世紀以来は特殊の儀礼用となり、一般の着用は行われなくなった（国史大辞典「烏帽子」の項）。材料を折り曲げて作ることから、烏帽子を作る職人を烏帽子折と言つ。

『師守記』貞治三年二月一日条に口才尼という扇商人の名が見え、古くから女性が扇の製作販売に従事していたことが推定される。『人倫訓蒙図彙』に「女の業なり」と言つごとく、町田本、舟木本『洛中洛外図屏風』や、喜多院本以下の「職人尽絵屏風」など、近世の風俗図でも、扇職人はほとんど女性。

扇は招涼の具であると同時に、装身具として用いられたので、扇売が烏帽子折と番いにされたのである。

烏帽子折、扇売ともに、職人歌合に初出。ただし、十二番本『東北院職人歌合』八番左、塗師の月の歌は、「我が宿の烏帽子みぼうし絹をいかにせん」と、烏帽子作りを詠んでおり（三番、職人尽参照）、『貞丈雜記』三、烏帽子之部に、「烏帽子師」の歌として、この歌を引いている。

◎夜やふかき 「夜」は、明暦板本・類従本には「秋」とあるが、誤写であろう。

◎月のひかりもさひゑほし 月の光を「さぶ」と表現する歌は多くはないが、「住吉の岸の松風音あそびゆえてさびたる夜半の月の影かな（源季広）」（万代和歌集）、「露凍る枯れ野の原の霜の上にさびたる夜半の月を見るかな（忠良）」（正治初度百首）、「庵むすぶ小野の篠原月さびて絶へぬあまりに鹿の音ぞする（季景）」（建仁元年八月和歌所影供歌合）など、鎌倉初期頃の例がある。職人歌合では、五番本『東北院職人歌合』三番左（十二番本では四番左）、刀磨の月の歌の例、「我が宿の低水に宿る月影のあやしやかにさびて見ゆらん」があり、本職人歌合でも他に、三番左、研の月の歌に、「いかにせむとかすもいらぬ剣太刀峯なる月のさび残るかな」、五十六番左、金掘の月の歌に、「眺むとて金も掘らぬつつさびのさびてぞ見ゆる秋の夜の月」とある。「寂ぶ」は、勢いが衰えて寂しげな趣になることで、深夜ないし明け方の月について言う言葉であつたらしい。ここでも初句に「夜や深き」と言っている。「月の光も寂び」から「皺烏帽子」と続くが、月の光の「寂び」を懸詞に用いた例は、伝統的な和歌ではなきさうである。「皺烏帽子」は、装飾のため表面にしわを多くつけた烏帽子。

◎かしろのうへに影のなりぬる 「影」は月影、すなわち月の光で、月が頭の上に来たことをいうのであろう。「頭の上」は烏帽子の縁語。「影」も、烏帽子の「懸け」（烏帽子を固着するため、その頂きから垂らして顎の下で結ぶ紐）に通じ、縁語と見るべきか。なお、二十八番右、冠師の月の歌、「更くるまで雲居の月に眺むとてかぶりのかげもかたぶきにけり」の「かげ」も、冠の「懸け」を懸けたものか。

◎秋さむきねやのあふきの風たえて 閨の扇は、寝間で用いる扇。「扇の風絶ゆ」は、秋寒くなって扇が不用になったことを言う。『日本職人辞典』は、班婕妤の秋扇の故事に関連つけて、この歌を「捨てられた女の閨怨。月の歌だが、恋でもある」（「扇売」の項）と解するが、ここは、「団扇先辞手 扇はしなを手馴らす比の風立ちて秋の扇ぞ遠ざか

り行く」(拾遺愚草員外)、「早秋五首 今はまた閨の扇も置く露の夕涼しき秋風ぞ吹く〈知家〉」(洞院撰政治家百首)、「夏の果て 夏果つる夜半吹く風の涼しきに閨の扇ぞまづ置かれぬる〈光俊〉」(新撰六帖、一) などのように、純粹に季節の推移を詠んだものと見るべきであらう。

◎雲のおりめのつきそかくる、 上句に「風絶えて」とあるから、雲を吹き払うべき風も絶えて、折角の秋の月が雲に覆われたことをいうのであらう。「雲のおりめ」は、「雲居」、「雲居る嶺」などからの連想で、「雲の居り目」と言ったものか。あるいは、「雲降る」から、「雲の降り目」と言ったものか。「め」は、場所というほどの意味か。いずれにしても、「雲のおりめ(をりめ)」という語はない。判詞に、「ことごとしく聞こゆれども」とあるように、無理な造語である点に滑稽味があつたのであらう。「おりめ」は「折り目」に通じ、扇の縁語。扇と月との関係は、和漢朗詠集に引く摩訶止観の句に、「月隠^レ重山^ニ兮^ニ擊^ツ扇^ヲ喩^フ之^ニ」(この場合の「扇」は団扇だが)とあり、これに基づいて、「夏果てて誰が山の端に置き捨つる秋の扇と見るや月影」(壬二集)、「よそへつる扇の風や通ふらん涼しく澄める山の端の月〈洞院実雄〉」(宝治百首)、「月似扇 手に取らば月をあげてや喩へまし置き忘れたる秋の扇に」(正徹千首)のような、月を扇に喩えた歌が詠まれた。ここでも、扇を使わなくなって折り畳んでしまったように、月が隠れてしまった、との連想が働いていよう。

◎停午の月をよめるか 「停午」はもと「亭午」で、日の南中すること。転じて、月にも言う。「正徹物語」下に、「停午月、空の真中にあるべき也。いくかのにてもあれ、空の真中にある月は、みな停午月也」とある。ただし、こは勿論満月。歌に「頭のうへに影のなりぬる」とあるのに対して言った。

◎雲のおりめ、ことごとしくきこゆれとも 前述のごとく、「雲のおりめ」という言葉が無理な造語で、ことさららしく感じられると言うのであらう。

◎しなれぬ恋のやせやまひ 「死なれぬ恋」という用例は歌では知らないが、「さりともと思ふ心にはかされて死なれぬものは命なりけり〈能宣〉」(三奏本金葉集、八、恋、玉葉集に、第二句「頼む心に」、「さりともと頼むにかかる命にて恋の病は死なれざりけり」(久安百首、上西門院兵衛、恋)、「さりともと死なぬ命のつれなさやつらきな

がらの頼みなるべき〈伊成〉(続後撰集、十二、恋)の、「死なれぬ命」「死なぬ命」などと同じく、相手がつれなくていつそう死んでしまいたいと思つたものの、それでもひよっとしたらと頼る気持ちもあつて死に切れないでいる、そういう恋の苦しさを言うのであろう。「瘦せ病」は、身の瘦せ細る病氣。「恋の病」という言葉は珍しくないが、「瘦せ病」という語は、伝統的な歌では知らない。ただし、五番本『東北院職人歌合』一番左、医師の恋の歌に、「君ゆへに心とつける瘦せ病あはぬつぎめに灸治してみん」とある。

◎むくのみ色に身はなりにけり 「むくのみ色」は、烏帽子の色的一種。『貞丈雜記』三、烏帽子之部に、「むくのみ色の多しあり。……むくのみ色は、黒くして少し紫ばみたるが如くなるべき歟。むくのみ、此の色なり」とし、頭書に、園大曆の「為烏帽子雖壯年人、棕実、さはし、或尋常物通用之」(文和二年九月二十四日条、今川大双紙の「引目の大小、人によるべき様、……漆の色はいかほども黒くすべし。むくのみ色とて、光はなくて色の黒くさらさらとしたるがよきなり。よき漆に、はこべらを絞つて能く合せて塗りたるが、むくのみ色にて早く干るなり」を引く。また、「烏帽子塗り様の事、黒塗り、棕の実、サハシの三品有り。黒塗りとは、漆にて黒くつやあるやうに塗りたるを云ふ。棕の実とは、漆にて黒く光なくさらさらと塗りたるを云ふ。サハシとは、漆にてつやなくさつと薄々と塗りたるを云ふ」と言う。貞丈は、「むくのみ」を棕の木の実と受け取っているようであるが、引用の今川大双紙の「色の黒く」という記事からすれば、「むくのみ色」の「むくのみ」は、実は「むくろじ」(無患子)のことではなからうか。(棕の木の実は濃い紫色だが、無患子の種子は黒い。)『守貞漫稿』二十五に、「薬子、京坂にて皮あるをむくろじと云、皮を去黒粒のみをつぶと云、江戸にては皮の有無ともにむくのみと云」とあり、「むくろじ」と「むくのみ」が混用されていた形跡がある。ここは、憔悴して肌が黒ずんだことを言う。

◎ほねこはき 「こはし」は、硬くて柔軟性に欠けるさま。材質が悪いか、よく磨いていないかして、骨がごつごつしているのであろう。

◎うすすくい 「統飯」は飯粒を練つて作った糊。「うす統飯」は、その薄い物を言うのであろう。こわい骨に薄い統飯を用いたのではよく付かないことから、上句全体で、下句「思ひもつかぬ」の「つかぬ」を導く序詞。

◎おもひもつかぬ人にこひつゝ「思ひも付かぬ人」は、意外な人の意であろうが、そういう意味であれば、「思ひも寄らぬ」、「思ひもかけぬ」などとするのが普通。それにしても、「思ひも寄らぬ」、「思ひもかけぬ」が、「人」に掛かる例は、和歌では知らない。ここは、扇作りに縁のある「付かぬ」という言葉をあえて用いたため不自然な表現になったのである。自分でも予想しなかったような人、具体的には恐らく、極めて身分の高い人に恋心を抱いてしまった悩み。なお、「付かぬ」には、扇の骨と地紙が付かないように、相手と一緒になれない、との意味も籠められていよう。

◎恋にやせくろむこと、本説なきにあらす 「痩せ黒む」は、痩せて肌が黒ずむこと。「本説」が何を指すかは、未考。「本説なきにあらす」という言い方をしているから、烏帽子折の歌の発想が必ずしも突飛ではないと、肯定的に評価したのであろう。

◎道理はたちてきこゆれと「道理立つ」は、道理が成り立つこと。

◎五文字、まことにこはく侍り 「骨こはき」という言葉自体が「こはく」てよくない、と茶化したのである。この場合の「こはし」は歌論用語で、表現が粗野で優美さに欠けること。このように歌の言葉を判詞に転用することは、伝統的な歌合でもまま行われるが、ここはもとより俗語を交えて詠むべき職人歌合なのだから、ただからかってみたに過ぎない。

◎今時の御念ほしは、ちとそりて仕候 類従本は、「……そりて候」。当時の流行を言うのであろうが、未考。

◎あふきは候 「くは候」という形は、他に、十五番右魚売の言葉、「魚は候。新しく候。召せかし」、三十五番左米売の言葉、「なを米は候。けさの市にはあひ候べく候」がある。これらはいずれも、謡曲等にまます見られる、一さて船賃は候」(項羽)、「さてかのあらましは候」(夜討曾我)、「一人も通し申すまじい上は候」(安宅)、「富樫殿の物しろしめされぬ謂ればさう」(幸若、とかし)などの例に並ぶものであろう。その際の「候」は「に候」の転で、謡曲の読み癖や幸若『とかし』の仮名書き例からして、「ソウロウ」ないし「ソウロ」、または「ソウ」のように、濁音であったと考えられる。湯澤幸吉郎氏はこの種の「は候」について、余情を含めて言う場合や問を表す場合などがある

ときれ〔謡曲に現れる『候』〕〔『國語學論考』所収〕、吾郷寅之進氏は、「は候」自身というよりは、「は」と「候」との間に省略があつて、その省略の部分によつて意味が決まるものと考えられる、と敷衍された〔近古に於ける語頭濁音の『候ふ』〕〔『文学』24巻5号〕。ここは、「扇は（いかが）です」という疑問の形を取つた、勧誘の表現と見るべきであらう。

◎一ほんあふき 未考。『日本職人辞典』は、「一本ずつ図柄などが違い、特製品だというのであらう」とし、岩崎佳枝氏も、「一本一本念入りに仕上げた扇」と解される〔『職人歌合中世の職人群像』二二二頁〕。

【絵】

烏帽子折は、烏帽子直垂袴姿で、腰に腰刀と火打袋。左手に製作中の折烏帽子を持って、台に載せた火鉢に鬚し、さらに右手の火箸に挟んだ熾を当てている。言葉にあるとおり、烏帽子をそらせているところか。左側に立烏帽子。

扇売は、小袖に打掛けを着、左手に地紙を掲げ、右手で前に数枚置いた地紙を指さしているところ。右側に小袖姿の少女。右手に扇の骨を二本持つ。二人の間に、扇を入れたと思われる箱（この種の箱は、喜多院本以下の『職人尽絵屏風』や舟木本『洛中洛外図屏風』の扇屋など、近世の風俗図によく描かれている）と扇の骨。

【参考】

○ 羅漢の骨は見えもこそすれ

折らせたる五節扇を持ち破り

（竹馬狂吟集、雑）

○ さてもそれがしが先祖にて候ふ者は、東は三条烏丸に候ひしよな。いでその頃は近衛の院の御在位の時、恭なくも八幡太郎義家、安倍の貞任を御追罰あつて、程なく都に御上落あつて、御参内あるべきとて、この左折りの烏帽子を折らせられ、君に御出仕ありし時、帝斜めに思し召し、その時の御恩賞に奥陸奥の国を賜つて、名をも陸奥殿と申す。そのごとく嘉例めでたき烏帽子折にて候へば、この御烏帽子を召されて程なく御代に出羽の国の守か、陸奥の国

の守に、ならせ給はん御果報あつて、世に出で給はん時、祝言申しし烏帽子折と、召されてめでたう、引き出物賜はせ給へや。

(謡曲、烏帽子折)

○ 源六、其の時立つて一回り回つて、烏帽子屋を呼び出ス。へ出る。源六、烏帽子が出来たかと云。へ一段見事に出来た。さりながら漆が少し干いで手を取るによつて、此のごとくに竹に挟うでおひタト云。源六、漆がいつ干ると云。へお去にやる道で干ると云。

(天理本狂言、あさう)

○ へやれよう心得い。末広がりといふは扇の事じや。へそれならばそれと疾う仰せられいで。へまだぬかすか。定めて知らぬ事はあるまひと思ふてやつた。よう聞きおれ。骨に磨きをあててとは、此の骨の事なり。地紙とは此の紙の事、要とは此の要の事、ざれ絵とは、たとへば松にても、梅にても、ざつと書ひたをといふ事じやに、あの古傘を取つてうせて。

(虎明本狂言、すゑひろがり)

○ 籠め骨と言ふは、常の扇には骨が十本有る。こめ骨には骨を十六本なりとも、十八本なりとも、骨の数を籠めたを籠め骨と言ふ。……目近とは、常の要よりは跡へ寄せて、爰をまるうして、手の内の持ちよひやうにしたを、目近と言ふ。

(虎明本狂言、目近籠骨)

○ 其の時烏帽子折の太夫、牛若殿を請じ申し、「扱冠者殿の召されうずる烏帽子は、大皺まびごうか小皺まびごうか、新世様か当世様、如何様なるを召されうずるぞお好み候へ。やがて折つて参せう」。牛若殿は聞こしめし、あら口惜しや、烏帽子はただ黒ければ、黒いと計り心得たるに、あまたの名のありける事よ、何とがな折らせうな、あふ思ひ出だしたり、我らが先祖は左折りを召さるる由を承つて候へば、人数ならぬ牛若も、左へ折らせ着はやと思し召し、「なふいかに太夫殿、此の冠者が着うずる烏帽子は、それなる大皺に、粒のちつとあらかなるを、一曲み曲ませ、雛形にあひをあらせ、櫛形をいがいがと、一撓め撓めて、左へ折つてたび給へ」。

(幸若、烏帽子折)

○ 扇の骨や御前七つ削りてな、八つ削りてな要とどう打たふや、好み給へや扇わ折りて参らせふ、老いに耄れては七つを八つと数あうえた、鳥へ参るぞ下向に扇を参らせふ

(田歌草紙)

○ いざいざ戻ろう今日の日を見よやれ、日も下がりに今日日を見よやれ、編み笠は茶屋に忘れた扇子は町で落と

いた、買ふて参せう今度の三吉町で、町にないやら扇を買ふて見ぬのふ、夏は過ぎ行く扇子は戻し参らせう

(田歌草紙)

○われらは、角ばった帽子バブレテまたは布製の円帽をかぶる。日本人は、一方が尖り他方が袋状となった絹製の帽子バブレテをかぶる。
(日本覚書、一)

十四番 帯売 白い物売

【職人尽】

〔職人尽発句合〕七番右、白粉師 木々の葉もけはひにけらし月の眉 白い物師が月の眉とみづから読みたれど、傾城傾国の化粧は恐ろし。

【本文】

十四番

とをやまのこしめくるまでふけにけり

くもまの月の井手のしたおひ

あきさむみ雲ものこらぬ月かけは

しもとみるまでしろいものかな

左哥、いひしれるさまには見え侍れと、右、

逸興ありてめつらし。よりに為勝。

人つまにかけしころものほそおひの

注解『七十二番職人歌合』稿(五)

とをやま―〔忠〕明とを山〔類〕遠山 かし―〔類〕腰 ふけにけり―〔類〕更にけり

くもま―〔尊〕雲ま〔類〕雲間 井手のしたおひ―〔類〕るての下帯

あきさむみ―〔類〕秋寒み のこらぬ―〔類〕残らぬ

しも―〔類〕霜 みる―〔尊〕見る しろいものかな―〔類〕しろい物哉

見え―〔尊〕〔類〕みえ

人つま―〔類〕人妻 ころものほそおひ―〔類〕衣の細帯

くけちもあらはうれしからまし
恋すとやひとのみるらむおしろいの

きはつくまでになかすなみたを

左、衣のほそおひといひ、人つまのくけち
など、よくとりなしたり。右は、白い物の涙に
きはつくらむ、いかさま色のくろきにや。しか
らは恋さめしつへし。左かつにこそ。

◇ おひうり

此おひたちて

のち、見候はん。

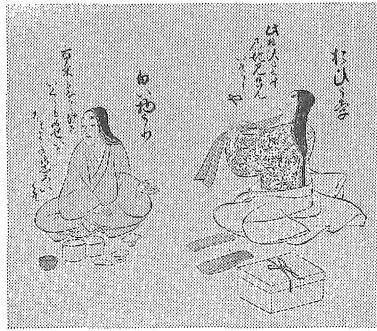
いそかしや。

白い物うり

百けもなからけも

いくらもめせ。いか

ほとよき御しろい候そ。



【語注】

◎ 白い物売は白粉を売る商人。

うれしからまし―〔類〕嬉しからまし

ひとのみるらむ―〔類〕人のみる覧

なかすなみた―〔類〕流す涙

ほそおひ―〔類〕ほそ帯

よくとりなしたり―〔類〕能取なしたり 白い物―〔忠〕明 白
いもの

きはつくらむ―〔尊〕きはつくらん〔類〕際つくらん くろき―
〔類〕黒き しからは―〔類〕然らは
かつ―〔類〕勝

おひうり―〔白〕帯うり〔忠〕十四番帯うり

おひ―〔白〕帯

のち―〔白〕〔忠〕後 見候はん―〔類〕見候はむ

いそかしや―〔忠〕いそかしや

白い物うり―〔明〕白粉うり〔類〕しろいものうり

百けもなからけも…御しろい候そ―〔白〕ナシ

御しろい候そ―〔類〕御しろいか候そ

帯壳、白い物壳ともに、職人歌合に初出。

◎とをやまのこしめくるまでふけにけり 「腰」は山の中腹ないし麓にかけての部分。「めぐる」は、取り巻くこと。「山の腰めぐる」という表現は、唐の白楽天が日本の智慧を試みるため渡来し、一漁翁（住吉明神）に詠みかけたという詩句「白雲帯に似て山の腰を圍る」（謡曲「白楽天」、実はこの句は『江談抄』所収、都在中作）が有名。これもこれを引いて、雲が遠山の中腹に棚引いている光景を言うかと思われるが、「……まで更けにけり」との関係は未考。「腰」、「めぐる」は帯の縁語。加えて、下句の「井手の下帯」は、『大和物語』の説話（次項参照）をもとに、「解き返し井手の下帯行きめぐり逢ふ瀬うれしき玉川の水（俊成）」（玉葉集、十、恋）、「幾春に井手の下帯めぐりあひて咲く山吹の花を見つらん（津守国冬）」（新拾遺集、二、春）などと、「めぐる」、「めぐり逢ふ」の枕詞のように用いられたので、その意味でも「めぐる」は、殊に「井手の下帯」と縁が深い。

◎くもまの月の井手のしたおひ 「雲間」の「雲」は、上句の暗示する雲とは別か。未考。仮名は違うが、「雲間の月の出で」から「井手の下帯」と続くのであろう。「井手」は山城国（現京都府綴喜郡）の歌枕。「井手の下帯」は、さる内舎人が井手でかわい少女を見初め、帯を交換して再会を契ったという、『大和物語』一六九段の説話によって、恋の歌によく詠まれる言葉。ただしこは、単に帯壳らしく「井手の下帯」という歌語を導き出したまでである。◎あささむみ 文法的には、すぐ次の「雲も残らぬ」に掛かると見るのが自然だが、意味的には下句の「霜」との関係が深い。

◎雲ものこらぬ月かけ 「雲も残らず」という表現は、「更けぬるか雲も残らぬ中空に秋風ながら澄める月影（冬平）」（新千載集、四、秋）のように、一片の雲も残らず晴れ渡った秋の夜空の月の美しさを言うのに用いることが多い。ここもそれに同じ。「秋寒み」からの続きでは、秋も更けて、月がますます冴える、ということであろうか。「雲も残らぬ月影」の「月影」は、夜空に照る月そのものを指すが、下句との関係では、地上を照らしている月の光と見るべきである。

◎しもとみるまでしろいものかな 地上を照らす月影を霜と見る見立ては、『和漢朗詠集』所収の『白氏文集』の

詩句「月照平沙」夏夜霜」を句題・典拠にした、「月影になべて真砂の照りぬれば夏の夜降れる霜かとぞ見る」(千里集)や、「夏の夜も涼しかりけり月影は庭白たへの霜と見えつつ〈長家〉」(後拾遺集、三、夏)を始め、歌に数多い。これらは夏の「霜」の例だが、ここでは、初句と照応して、秋寒い時節なのでなおさら、月影が霜と見えるのだと解すべきであろう。「白いものかな」に商品の「白い物」を縁語的に言い懸ける。「白い物」は白粉。

◎いひしれるさま「言ひ知る」は、しかるべき表現の仕方を心得ていること。「左の、朝行く鹿やなどいへる、言ひ知りをかし」(雲居寺結縁経後宴歌合、四番判詞)、「霧立つ野辺といへる詞、言ひ知らぬに似て悪しう聞こゆるなり」(元永二年内大臣家歌合、五番判詞)、「いかでか月の澄み渡るらんといへる程、言ひ知りて聞こえ侍れば、以右為勝」(中宮亮頼輔家歌合、九番判詞)など、歌合の判詞でしばしば用いられる。

◎人つまにかけしころものほそおひの「人妻に(思いを)かけし」から「かけし衣」と続く。また、「かけし……細帯」と続くとも取れる。「人妻」の「妻」は「褌」に通じ、「衣」、「細帯」とともに、相互に縁語の関係。

◎くけちもあらはつれしからまし 布の端を折り込んで縫い目が表に見えないように縫うことを「衿ける」という。細帯の「くけち」は「衿け地」で、衿け縫いをした布地の意か。または、衿け目のことか。「クケ帯」という語が『多門院日記』天正二十年九月十三日条に見える。いづれにせよ、その「衿け地」から人目を避けて通る抜け道の意の「匿路」に言い懸ける。人妻に逢うための抜け道でもあったら嬉しいことだろうに。

◎恋すとやひとのみららむ 語調からすれば、実際はそうでないのに、恋しているのだと人は誤解するであろうか、という意味に取れそうだが、ここは恋の歌だから、実際に恋をしていて、そのことがばれてしまうのではないかと恐れているのであろう。

◎おしろいのきはつくまてになかすなみた 「おしろい」は、もと女房詞か。「白い物」に同じ。絵の言葉にも「おしろい」とある。「際づく」は、汚れなどが際立つこと。白粉が解けて際づくほどに沢山流す涙。

◎白い物の涙にきはつくらむ、いかさま色のくるきにや、しからは恋さめしつへし 「恋醒め」は、恋の思いが醒めること。白粉が涙のために際づくというからには、きつとよほど地肌の黒い女なのだろう、それなら恋醒めして

しまうであろう、と茶化した。

◎此おひたちてのち、見候はん 「おひたちて」は、絵にあるとおり、「帯裁ちて」であろう。「見候はん」は、裁った帯の出来具合を見ましよう、の意に取れなくもなきさうだが、やや不自然。実はこの言葉は、右の白い物売が白粉の宣伝をしたのに対して、「今手が離せないから、後で見ましよう」と答えたものではなからうか。そう考えると、次の「忙しや」という言葉が生きてくる。『中世職人語彙の研究』もそう解釈している（「帯売り」の項）。白い物売は客に呼び掛けたのだが、帯売自身も客であり得るので、この解釈は成り立ち得るであろう。ただし、白い物売が、帯売と反対の方を向いている（諸本同じ）点に問題が残る。

◎いそかしや 忠寄本は、「し」の右に「ハ」と校合。

◎百げもなからげも……御しろい候そ 白石本は、この言葉を落とす。

◎百げもなからげもいくらもめせ 「百げ」「なからげ」の「げ」は、「筥」で、白粉の容器のこと、すなわちここでは、白粉の量を示す接尾語か。『中世職人語彙の研究』は、「絵に描かれている容器の」高さ十センチ位の大きな方が百箇で、その半分位のが半箇であろう」（九五頁）とするが、そういう大きな単位で売るといふのは不自然で、白い物売が手に持っている小さな皿のような容器一杯分を「筥」と言ったのではなからうか。それを百でも半分でも好きなだけ買ってくれ、というのは、両極端を誇張して言ったままで、実際そういう面白い口上が行われていたことであろう。なお、明暦板本は、「百げもなからげも」と、濁音表記。書言字考節用集にも、「筥ひ礼記註、盛ひ食器」とあり、「げ」と読むべきか。

◎いかほとよき御しろい候そ 「どんなによい白粉ですことか」と、客を誘っているのである。体言に下接する「候」は、助詞「は」に下接する「候」（十三番語注「あふきは候」の項参照）と同じく、「に候」の転で、「ゾウロウ」、「ゾウロ」ないし「ゾウ」などと濁音であったと思われる。湯澤幸吉郎氏は、「問の意や感動の意を表す際に多く用ひるやうである」（『謡曲に現れる「候」』△『國語學論考』所収）とされ、来田隆氏は、洞門抄物の用例が、終止法以外に用いられることがない、すなわち、全てが文末助詞を伴って文末部に用いられていることから、強く念を押して

発言を言い収めるという性質を持っている、とされた。これも、白粉の上質なことを、客の心に強く訴えかける機能を持っていたと思われる。なお、類従本は、「御しろいか候ぞ」と、「が」を入れるが、これでは意味が通じがたい。誤写であろう。

【絵】

帯壳は、小袖袴姿で、帯の一端を口に銜え、小刀で縦に裁っているところ。左に帯二筋と、帯の入っていると思われる箱。

白い物壳は、小袖姿で、左手に白粉の容器を持つ。容器は、小さな皿状で、正方形の蓋が付いている。ともに材質は不明。前に同様の容器二つと、桶状の大きな容器二つ。それに小さな乳鉢と乳棒様の物。これらは白粉を練るのに用いるか。乳棒様の物の代わりに、白石本と忠寄本は、皿の上に折り畳んだ紙を載せたような絵を、類従本は、皿様の物だけを描く。また、類従本は、小さな容器の蓋を落とす。